



つつじ

# 町内会短信 6月号

2022年6月1日 川沿中央第一町内会長 金山征晴

水無月

新たな体制での町内会の活動も、ひと月以上が経過しました。先月お知らせの通りお花見等も中止して相変わらずの状況ですが、連休後の感染拡大は心配したほどの爆発的な拡大は回避できたようです。ここへ来て再び減少傾向が見られ、収束への期待も見えてきたでしょうか。町内会活動がコロナでままならない中、事業のあり方についてももう一度見直してみようと委員会を立ち上げました。もっと望ましいあり方がないのかじっくり考えてみたいと思います。

## 5月の町内会活動報告

- 5月 4日(水) **どんぐり公園清掃** (役員)
- 5月 8日(日) **町内会春の大掃除** / **連町定期総会**(書面決議となりました)
- 5月11日(水) **町内会資源回収** / **ふれあいガーデン整備**
- 5月17日(火) **事業検討委員会**
- 5月18日(水) **どんぐり公園清掃** (Aグループ)
- 5月25日(水) **ふれあいガーデン整備**

## 6月の町内会活動予定

- 6月 1日(水) **どんぐり公園清掃** (Bグループ 9:30)
- 6月 8日(水) **町内会資源回収** / **ふれあいガーデン整備** (8:30)
- 6月15日(水) **どんぐり公園清掃** (Cグループ 9:30)
- 6月22日(水) **ふれあいガーデン整備** (8:30)
- 6月29日(水) **どんぐり公園清掃** (Dグループ 9:30)

※ お花見・そよ風コンサートは中止といたします

### コラム

### 【川沿の小窓から】

川沿中央第一町内会 相談役 柴田田鶴子

3月末で町内会長を辞した私に、この小コラムを任せて頂けることとなりました。先月に続く第二弾として何か良い題はないかと考えていました。テレビのCMに猫と少女がガラス窓一枚を隔てながら何年もかけて心を通わせていく、という内容でした。室内で窓際に座る猫は「静」、猫をめがけて駆け寄ってくる少女は「動」です。3月末でほとんどの公職を離れ、時間的にも精神的にも少し余裕の出来た私は今や窓際の「静」の世界。ゆったりとガラス越しに路を行き交う人達を眺める「ゆとり」を手にすることができました。そんな窓越しから観る川沿の町内や世の中の出来事を窓ガラス越しの少し離れた視点から皆様にお伝えできたらと思います。こうして「忌憚のない意見」を言ったり書いたり出来る今の日本の「言論の自由」のありがたさを改めて感じています。

裏面へ →

## 郷土史より (視野を広げて) — 民俗学の先駆者・近藤富蔵(1)

郷土歴史家 吉田邦行



1827年、南海の洋上・八丈島に23才の咎人(とがにん)が流されてきた。徳川譜代(ふだい=代々その家の系統を継いで来ること)の旗本(将軍にお目通りできる資格)・近藤重蔵の長男富蔵(1805-1887年)である。当時は江戸を揺るがす大事件であった。

そもそも、目黒「鎗(やり)ヶ崎事件」の発端は、父親である旗本・近藤重蔵にある。尋常ならざる気質の持ち主で、困難極める未開地の探検を4回行い、その功績を認められ旗本に任じられた。通常の務めは小普請方(こぶしんかた=小規模の修築工事の業務)の役職であったが、蝦夷地に関する建言や地誌書8冊を幕府に献上している。その後ロシアとの関係が悪化し、再び蝦夷地御用を命じられ蝦夷地に派遣されることとなった。江戸に帰った重蔵は、「総蝦夷地要害之儀二付心得候趣申上候書付」を献上した。これら探検の功績を認められ書物奉行を任じられた。ここで11年間に多方面にわたり千五百巻ほどの書物を執筆した。まさにまわりが驚嘆する超人的な仕事ぶりであった。しかし、余にも豪放磊落のために幕閣にもつけつけ意見を言い、やがて幕閣と衝突し大阪弓矢鎗奉行に左遷された。だがここでも自由奔放な行動のため解任され、江戸で永久小普請役の降格移動となった。江戸に戻った重蔵は、絶頂期に購入していた別荘の件で窮地に追い込まれ、それが発端となって目黒「鎗ヶ崎事件」となる。富蔵が関わる事件を時系列に列記すれば、次の通りである。

- ① 書物奉行のとき、重蔵は妻を離婚して再婚している。富蔵がわずか4歳で、実母と生き別れせざるを得なかった、悲しい生い立ちを背負っている。
- ② 羽振りが良かった重蔵は、鎗ヶ崎(目黒駅の近辺)の土地を地主である元博徒・塚越半之助から購入し別荘を造築し、庭園に富士塚を築き浅間(せんげん)神社の分社を建立し一般に開放していた。
- ③ やがて自身の驕りからか、紅葉山文庫の改築をめぐり、老中水野出羽守と対立し、大阪弓矢鎗奉行に左遷された。
- ④ このとき別荘と庭園の管理を塚越半之助に依頼した。大阪での重蔵は、以前にも増して放蕩・散財を繰り返した。父のまったく家庭を顧みない思春期の富蔵にとって父の所業は、耐えられぬ思いであったろう。
- ⑤ 父子の間に齟齬が生じたとしても当然であったろう。事の詳しい事情は不明だが、富蔵は天満鈴鹿町の本教寺に4か月ほど預けられた。この本教寺滞在中に佐藤そえという14歳の少女と出会ったことが、彼の生涯を変えることになる。(次号につづく)